

## 看護学生と地域住民による交流会の実践

### Practice of exchange meetings between nursing students and local residents

野村千文 石井成郎 増永悦子 肥田 武 榊原久孝<sup>1</sup>

Chifumi Nomura Norio Ishii Etsuko Masunaga Takeshi Hida Hisataka Sakakibara

#### 要旨

一宮研伸大学は、教育目標に地域社会に貢献する姿勢の育成を掲げている。著者らは、学生が地域社会に関心を持ち、地域住民と交流した体験から学びを深めることが重要であると考え、交流する場の創出に取り組んできた。2019年度は「地域の方との交流プログラム」を開催した。参加者は大学所在地A地区老人会会員、1、2年次学生、教員で、グループ単位の懇談形式で実施した。企画段階から学生が参画し、懇談時の話題も選定した。さらに、当日の座席配置や進行など工夫したことにより、学生が初対面のA地区老人会会員と長時間会話を続けることに役立ったと考える。本交流会にて教員は、スケジュール調整などの補助を担いながら、生じた課題について学生と対応策を考える体験をした。今後も、学生の成長を捉え共に考える姿勢が重要であると考ええる。

キーワード：看護学生 地域住民 交流会

#### I 背景

一宮研伸大学は、教育目標の1つに、地域社会に貢献する姿勢の育成を掲げている。著者らは、地域社会に貢献する姿勢を培うためには、学生が地域社会に関心を持ち、地域住民と交流した体験から学びを深めることが重要であると考え、大学開設時から、学生が地域住民と交流する場の創出に取り組んできた。

2018年度は、大学所在地であるA地区老人会会員（以下、住民と表記する）と本学学生（1期生、2期生）や教員が交流する機会を2件実施した。1件目は、2018年10月開催の第1回大学祭における「地域住民の皆様との交流会」である。参加者は、学生有志14名と教員、住民50名であり、学生が住民と親睦を深める機会となった。2件目は、2018年12月開催のA地区老人会主催による「三世代交流会」である。本会は、A地区の住民三世代が一堂に会し、レクリエーションや趣味活動の成果発表などを通して、相互交流をはかることを目的としていた。A地区老人会より、本学へ参加依頼があり教員3名が参加した。本交流会の運営

には、A地区小学校、PTA会、地域づくり協議会などが協力しており、打ち合わせ会議を通して、小学校教諭や民生委員と情報交換する機会となった。

これらの実績を踏まえ、著者らは、2019年度からは、A地区を拠点とした大学の教育・研究における地域連携のあり方についての検討について取り組んできた。2019年度は前年度と同様に、大学祭（第2回：2019年10月開催）において「地域の方との交流プログラム」を開催した。本プログラムは2部構成で、第1部はシンポジウム、第2部は学生と住民との交流会である（資料1）。なお、この取り組みは、2019年度特別研究の助成を得て、研究計画は本学の学術・倫理審査委員会の審査・承認を得て実施した（研究課題：一宮市貴船連区を拠点とした大学の教育・研究の地域連携基盤形成の調査検討 承認番号2019-6）。

「地域の方との交流プログラム」の企画運営は、本研究の研究代表者ならびに共同研究者5名（以下、運営教員と表記する）で実施した。

本稿では、第2部交流会の実践について報告し、

<sup>1</sup> 一宮研伸大学看護学部

企画運営のポイントと今後の展望について述べる。

## 資料 1 企画内容

一宮研伸大学大学祭

日程：令和元（2019）年 10 月 19 日（土）午前 9 時から午後 5 時 40 分

「地域の方との交流プログラム」企画内容（2 部構成）

### 第 1 部 地域の方との交流シンポジウム

テーマ：一宮研伸大学、看護学生に期待することについて

日 程：令和元年 10 月 19 日（土）9 時 10 分から 10 時 30 分

場 所：本学・3 階きわみホール

対 象：一般、本学学生、教職員

参加方法：事前申込みなし。当日来場可。

#### 【内容】

学生は、本学の歴史、大学生活の様子、将来の抱負などを発表する。シンポジストは、市民の視点、看護専門職の視点から本学や看護学生に期待することについて発表する。その後意見交換する。

進行役：教員、2 期生 1 名（大学祭実行委員会より選出）

シンポジスト：4 名

A 地区老人会 役員

・市民の視点から、本学、看護学生に期待することについて

看護職 B 訪問看護ステーション 所長

・専門職の視点から、本学、看護学生に期待することについて

学生発表者 2 名（2 期生）

・本学の歴史、看護師への道のり、学校生活、どんな看護師になりたいか

### 第 2 部 地域の方との交流会

第 1 部シンポジウムの終了後に、学生、教職員と住民との交流会を実施する。小グループに分かれての懇談を通して、親睦を深める機会とする。

日 程：令和元（2019）年 10 月 19 日（土）午前 10 時 30 分から 12 時

場 所：本学 3 号館 1 階 第 1 講義室

対 象：住民（定員 30 名）、本学学生、教員



## II 実践

第2部交流会は、2019年10月19日（土）10時45分から12時に実施した。参加者の内訳は、住民39名、学生13名（1年次3期生11名、2年次2期生2名）、教員4名（運営教員2名、当日参加教員2名）の合計56名であった。

### 1. 企画会議

本プログラムは企画段階から学生が参画し、企画会議は、2019年6月から10月まで毎月1回開催した。企画会議に参加し運営に携わる学生（以下、運営担当学生と表記する）は、大学祭の地域交流担当委員である1年次学生（3期生）4名であった。運営担当学生は、7月の企画会議から出席し、運営教員と共に交流会の進め方について意

見交換した。

### 2. 運営担当学生の活動

運営担当学生は、住民と学生が懇談する際の話題についてアイディアを出し10項目を選定した（資料2）。話題の構成は、学生が高齢の住民へ聞きたいこと「皆様のことについて」は4項目、A地区住民がとらえる地区の特色「A地区について」は3項目、住民が考える本学への期待「一宮研伸大学について」は2項目、住民が考える看護師への期待「看護師について」は1項目であった。

また、運営担当学生は、交流会当日参加の学生募集や、会場設営、飾りつけなども行った。

## 資料2 進行計画と話題

開催日：令和元年10月19日（土）午前10時45分から12時終了予定

場 所：本学・3号館 1階 第1講義室

### 【 進 行 】

1. グループ別に着席
2. 交流会趣旨説明
3. 名札作成：ラベルにマジックで、ひらがなで「名字」を記入
4. 自己紹介：グループ内で自己紹介
5. 懇談（約60分間）

### <学生からの話題> \*この中からいくつかを話題にします

#### 皆様のことについて

- 1) いま、熱中していること（マイブーム）はなんですか
- 2) ご自身の長所（好きなところ）について教えてください
- 3) これまでの人生で、最も印象に残っている出来事はなんですか
- 4) 今後の人生、どのように過ごしていきたいとお考えですか

#### A地区について

- 5) A地区は、どのようなところですか  
例：地区の特性、歴史、暮らしやすいところ
- 6) A地区では、住民の皆様でどのような活動をされていますか
- 7) A地区をさらに盛り上げるために、どのようなことをお考えですか

#### 一宮研伸大学について

- 8) 一宮研伸大学の学生に、どのような印象をお持ちですか
- 9) 一宮研伸大学に、どのようなことを期待されていますか

#### 看護師について

- 10) 看護師に、どのような看護（対応）を期待されていますか。これまでのご経験などからお考えをお教えてください

6. 質問紙調査のお願い、質問紙記入
7. 閉会挨拶



### 3. A 地区老人会への参加依頼

交流会参加者は、前年度と同様に A 地区老人会を対象とした。A 地区老人会の会長に事前に了解を得た上で、役員の会合に運営教員が出向き、趣旨説明と参加依頼を行った。その後、住民への案内パンフレット配布は役員が行った。なお、役員への負担を避けるため、事前の参加申込は不要、当日来校する方式を採用した。

### 4. 交流会の進め方・運営上の工夫

交流会は、グループ単位での懇談形式とした。グループ編成は、1 グループあたり 5 から 6 名配置（学生 2 名、住民 3 から 4 名）で、学生と住民が懇談しやすい人数とした。なお、住民の参加人数は、学生が対応できる範囲を想定し定員 30 名とし、7 グループ編成とした。また、運営教員以外の当日参加教員 2 名は、1 名ずつグループに配置した。

グループ席は、互いの間隔を広くとる配置とした。これは、高齢者の聴覚機能の特性を踏まえ、周囲の喧噪により、グループ内の会話が聞き取りにくくなることを回避するための配慮である。

進行は、資料 2 のように実施した。進行役は運営教員 1 名が担い、運営担当学生は、当日参加学生へ懇談時の話題 10 項目などの説明を担当した。

住民と学生の初対面となる受付時から、互いに打ち解けられるよう、学生がグループ席へ誘導し、着席後は名札作成の説明や作業の手伝いを実施した。その結果、学生から住民に話を始めるきっかけとなり、住民も応答する過程で、会話が進み、開始前から和やかな雰囲気形成していた。

当日は進行計画表（資料 2）を全員に配布した。進行計画表には、本日の流れ、時間配分と共に、学生より住民に聞きたい話題 10 項目を明示した。これにより、運営担当学生以外の当日参加学生も含む学生全員が、話題の内容を理解し、グループでの懇談時、学生から質問し会話を続ける一助とすることができた。また、住民側も、学生が何を話題にするのか心得て応答でき、時には「○○については・・・」と話を始めることもあった。

## III 考察

本交流会を振り返り、学生が住民と交流する体験の場のあり方について考察する。

### 1. 体験の場「交流会」の実施方法について

本交流会は、小グループ単位での懇談形式を用い、事前に話題も選定し実施した。

今回の参加学生は 13 名中 1 年次が 11 名と大半を占めていたため、運営教員は、初対面の人とコミュニケーションをとりながら、長時間会話を続

けることができるか心配していた。しかし、どのグループも、会話が途切れることがなく談笑が続いた。事前に話題を選定したこと、参加者全員に、話題を明示した資料を配布したことなど、1 年次学生にも見合った準備を十分にしていたことが役立ったと考える。

交流会における参加学生の構成については、複数学年でグループ編成を行うことができれば、高学年次学生が後輩をサポートしながら、互いに学び合う体験ができると考える。今後は、全学年を対象に参加を募り、複数学年でグループ編成できることを目指す。

交流会のプログラムについては、懇談形式以外にも、看護専門科目の履修状況を踏まえ設定することも検討する。高学年次学生であれば、参加者の特性に合わせ、関連した健康課題について話題提供を行うこともできると考える。看護系大学の卒業時に求められる能力については、日本看護系大学協議会が「学士課程においてコアとなる看護実践能力」を検討してきた。この看護実践能力の一つに「地域の特性と健康問題をアセスメントする能力」が提示されている（日本看護系大学協議会, 2017:P24）。すなわち、学士課程の看護学生は卒業時に、地域の人々の健康課題を把握し、必要な看護援助を判断する力が求められている。本学においても、学生が専門的知識・技術を活かし、住民に役立つ情報を発信する経験を積むことは、地域社会に貢献する姿勢を培うためにも有用であると考えられる。

さらに、住民との交流を継続する上では、人口や高齢化率、独居高齢者の割合など地区の特性（一宮市福祉部編集, 2018:P19）を理解すると共に、住民への調査にて本学に期待することを分析した上で、A 地区を拠点とした地域貢献活動のあり方について検討することが重要である。2019 年度に実施した調査結果を踏まえ、今後提言していく。

### 2. 体験の場における教員の役割について

本交流会は、正課の授業ではなく課外活動に位置付けられる。よって、運営教員も、課外活動における学生の学びを支援するために、教員が担う役割や支援のあり方について考える機会となった。

今回、運営担当学生は 1 年次で、前年度大学祭での交流会経験もない状況であった。当初は、運営教員との企画会議に緊張していたが、徐々に役割を理解し、担当した事項をやり遂げていった。運営教員は、その過程に同行するなかで、学生の意見を取り入れた企画が成功するよう、作業スケジュールなどの調整や会場設営の補助などの役割を担っていた。陶山ら（2019）は、体験の場は授

業の正課教育だけに限らず、授業外の体験の場にも関心をもつことを推奨している。さらに、体験学習における教員の役割について、教員が用意した体験から学ばせようとするのではなく、学生と一緒に体験し考えるという姿勢をもつことを提言している。本交流会においても、運営教員は、学生らが協力して事を成し遂げていく姿を頼もしく思い、体験の場で生じた課題について、学生と共に対応策を考えることができていた。今後も、教員は、体験の場における学生の成長を捉え、共に考える姿勢を持つことが重要であると考えている。

#### 謝辞

本交流会の実施に際して、ご協力を頂きました  
A 地区老人会会員の皆様に心より御礼を申し上げます。

ます。

#### 利益相反

本実践に関して開示すべき利益相反はない

#### 文献

一般社団法人日本看護系大学協議会（2017）：看護学士課程におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標，24.

一宮市福祉部編集（2018）：第7期一宮市高齢者福祉計画（含 介護保険事業計画）思いやりライフ 21 プラン・概要版，19.

陶山恵子、竹中喜一（2019）：高橋平徳、内藤知佐子編集，『看護教育実践シリーズ5・体験学習の展開』，第10章，東京：医学書院

